第４回　下田市立小学校在り方検討会議【議事録】

日　　時	令和７年 12 月 16 日（火）14 時 00 分から 16 時 30 分
場　　所	道の駅　開国下田みなと　4F 会議室３

開会　学校教育課　平川課長

皆さま、こんにちは。まだお見えになれてない方もおられますが、定刻となりましたので、ただ今より、第４回下田市立小学校在り方検討会議を始めさせていただきます。初めに、会長となります教育長の山田よりご挨拶を申し上げます。

１．教育長挨拶　山田教育長

改めまして皆さんこんにちは。未来の下田創造プロジェクト会議に負けないぐらいの色々な分野の皆さまがお集まりくださって、今回開催できます。お忙しいところ、本当にありがとうございます。私事なんですけれども、私、新採が東京都の江戸川区だったんです。東京都江戸川区の公立中学校で、いつも学校に通勤する時は、総武線を毎日使っていたんです。船橋から電車に乗ると、決まって座る車両と位置がありまして、大体その席に毎朝座ると、お向かいの方とか、斜向かいの方とか、あるいは隣の方とか、大体同じような方が１つのルーティーンのように通勤するっていうのを望んでいるのかななんて思います。同じ風景をずっと見ることになるわけです。先日、健全育成会のお便りを読みましたら、同じようなことが書いてありました。その方は、いつも座る席と逆側の席に座ってみた。そしたら風景が全く違う。伊豆急線っていうのは片方がもう山で片方海ですので、山が見えるか海が見えるかというその違いがあるわけですが、たまたま何かのきっかけでいつもと違う方向を向く席に座ったら全然朝の気持ちが違ったっていうようなことがあったみたいです。見方、あるいは考え方が、がらりと変わる。確かそんなお便りだったと思います。見方、考え方というのは場面場面で人それぞれです。もう１つ、それに似たような話で、これまで何度もしてきたような話で申し訳ないですが、ある特別支援学校の小学部の子供たちが、夏に小さな庭でですね、簡易プールを出して水遊びをしていました。そこで 10 人ぐらい楽しく遊んでいたのですが、１人の男の子が、なんとなく顔色を変えたような感じで、プールから飛び出してきて、廊下に上がって、お手洗いの方に、慌てた顔つきで走って行きました。そしたら、その廊下の途中で、うんちをしてしまったということで、お腹が痛かったのか、柔らかいうんちをしてしまったということで、周りにいる先生が、声をかけるんです。三者三様で、例えば１人の先生が、こんなところにしてしまって。という声かけをする先生で、もう１人はあと少しでお手洗いだったのにね。と声かけをする先生。もう１人は、プールの中でしなくて偉かったわね。という声かけをする先生。それぞれ対象となる子供によっても声のかけ方が違うと思います。この子だったらどんな声をかけるかという、それぞれ見方や考え方、対象の捉え方が違うことで言葉も変わってくる。視点を変える、考え方を変えるということです。先ほど、未来の下田創造プロジェクトの話をしましたが、その時に武井先生がお見えになって、話をしてくださいました。その時に、教育とは何でしょうという話がありました。武井先生は、教育とはなんでしょう。ということでお話を始めた時に、子供の今を否定すること。とおっしゃいました。その時、なんとなく目から

鱗というか、こういう考え方もできるんだなと思いました。今の子供の今を否定すること。なぜかというと、現在のままで良いということではないという理由をつけてお話をしてくださいました。見方を少し変えるだけでそういう表現になるということに驚きを隠せない自分がいました。ただ、現在を、今を大切にできなかったら未来は作れない。だから今の姿は尊いんですよ。とそんな話もしてくださいました。ここを大切にして、魅力的な学校の姿を皆さんとともにこれからも追い続けていきたいと、そんなふうに思います。今日は、静岡大学特任教授の宮島先生に来てくださいました、それから、笹瀬さん。静岡大学教職大学院学校組織開発分野というところで、実際の菊川市の教育委員会学校教育課付で学校等改善支援研究員ということでお勤めをくださっています。色々なコミュニケーションが取れるといいなと思います。限られた時間ですけれども、今日は皆さんよろしくお願いしたいと思います。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。それでは、次第に従いまして進行をさせていただきます。続きまして、学校教育課参事の宇仁より、今回の趣旨についてご説明申し上げます。

学校教育課　宇仁参事

改めまして、こんにちは。下田市教育委員会の宇仁と申します。本日もどうぞよろしくお願いいたします。9 月 3 日に行われました第 3 回では、静岡大学宮島特任教授さまから魅力ある小学校の創造をテーマにご講義をいただきました。川根本町での取り組みをご紹介いただき、下田の未来をつくるためには、地域の財を最大限に活かし、子供が育つ学校づくりを推進すること。この子供たちも教職員もトライアンドエラーで 7 色の小学校の良さを中学校で融合し、化学変化を起こすような学校づくりを。といった、たくさんのご助言をいただきました。本日も前回に引き続き、静岡大学宮島教授さまをはじめ、これまでご参加いただいた皆さまから出していただいた下田ならではのアイデアをもとに、グループごとに提言を作成していただきたいと思います。各学校区の代表、区長さま、保護者の皆さま、学校、保育園、こども園関係の皆さまの幅広い視野やお考えを持った皆さまのお力をいただき、児童の学びや豊かな経験を育むための小学校のあり方についての提言についてご協議いただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。次に、事務局より配布資料につきまして、係長の稲葉よりご説明申し上げます。

～係長より配布資料の説明～

学校教育課　平川課長

それでは、これからの進行は山本指導主事にお願いします。よろしくお願いします。

学校教育課　山本指導主事

指導主事の山本と申します。本日はよろしくお願いいたします。それでは早速グループワークに入っていただきますが、何点か具体的に説明させていただきます。本日の最終的な目標は、グループごとの提言を作っていただくことになります。用紙で言うと右側のところになります。それが本日のグループワークの目標となります。提言を作るにあたって、左側は、前回を少し想起していただきながら、改めて小規模校を存続するときのメリット、デメリット、学校を統合する場合のメリット、デメリットを整理していただきながら、最終的には右側の提言を作るというような形にしたいと思います。右側は表になっています。様々な視点から多面的に考えていただければと思います。それから、短い時間ですので、その中で言語化するのがなかなか難しいということも出てくるかと思われます。その場合は事務局で、発表用のものを集めた時にまとめをしたいと思いますので、活用できるようなキーワード等も残しておいていただけると大変助かります。そして、自分の方で1つだけ資料を用意させてもらいましたので、正面のスクリーンをご覧ください。学校には、先生方が使う法的に決まった参考書みたいな、指導要領というものがあります。今、新しく文科省の方で話し合いが始められています。2030年度ということで、まだ5年ぐらい先のことですが、少し紹介させていただきます。途中段階ですけれども、見ていただければと思います。労働市場の流動化が始まる。社会でどういうことが起きるかということです。それから、就業期間の長期化、国際化で人口が多様化していく。内側からという言い方で文科省はまとめてありました。そのことによって社会が分断する可能性がある。こんなことも書かれています。マルチステージの人生モデルの転換は子供たちには必要ではないか。これはですね、今、教育を受ける期間、働く期間、それからリタイアっていう流れが変わってくるだろうという予測だと思います。働く期間があったり、休んだりする期間があったり、また働いたり。このようなことが言われています。すでに3回ぐらい転職するのが世の中では平均的になってきている。世の中でさらにそれが進むのではないかということが推測されています。その中でこんな言葉が書かれていました。自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の作り手の育成が必要だろうと指導要領に盛り込まれてくるという予測になっております。その中で、さらに具体的に言うと、好きを育み、得意を伸ばすことが子供たちには必要ではないか。それから、当事者意識を持って自分の意見を形成し、対話と合意できる力が必要ではないか。こんなことを今文部科学省の方で話し合いをしているということになっております。新しい学習指導要領にはこのようなことが盛り込まれてくるのではないかなということが推測されますので、これも参考にしながら、今後の下田の小学校のあり方について提言を考えていただければなと考えております。それでは、この後、ファシリテーター中心にグループワークをしてもらいます。90分間話し合いをしていただき、それから発表という形にしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。何か質問がありましたら、気兼ねなく声をかけていただければと思います。それでは、ファシリテーターの先生方、よろしくお願いいたします。

～意見交換～

学校教育課　山本指導主事

時間となりました。今回も熱心なご協議ありがとうございました。この後は、各グループの提言を発表していただきたいと思います。それでは、A グループからよろしくお願いいたします。

A グループ

A グループです。よろしくお願いします。現実的にできるかできないかとか別として、こんな方法が考えられるのではないかという形で色々意見を出し合いながらまとめていきました。様々な体験あるいは人との繋がりによって、子供たちがいざという時の対応力や、その場を乗り越えていく順応力を高めていけるように今後していきたいというところです。2 つめは、教育環境として学校がどうあったらいいのかという話です。例えば、安心して失敗できる場所でありたいと、それから安心して子供たちがチャレンジできる場所でありたい。その中で子供の居場所もしっかり確保していくということが大事になってくるのかなと話になりました。３つ目です。子供たちに色々な考えを持っていたり、様々な子供たちがいますので、個別のニーズで対応していくという視点の意見です。子供が選択できる幅を広げてあげたらどうかと思います。興味関心に応じて活動を選んでいったりだとか、教科を選択できたりしても面白いのかなと思います。それから、通級指導的に学校を選んでいくとか、そういったことも考えられるのではないかという意見です。４つ目は、ICT を効果的に活用していくのがいいのではないかと思います。他校との交流というところもありますが、実際に子供たちが他校の子供と会うっていうのも大事なところかと思いますが、ICT を活用して、離れた場所でも交流することによって、多様な考えに触れることもできるのではないかと思います。そういった交流する活動というのは、例えば、2 つの学校が 1 つで集まって交流することで、担任の先生が 2 人ということになるので、色々な先生との出会いに繋がるというところがあるのではないかという意見です。５つ目は、今、スクールバスを活用している部分もあるかと思いますが、そういったバスのみならず、ものを共有すること、あるいは人を共有するというところも視点において活用して共有していくのがいいのではないかとまとまりました。以上です。

B グループ

B グループです。課題克服に向けた下田市独自の策として、まず 1 つ目は、小規模校のメリット、デメリット、そして統合する場合のメリット、デメリットを話した上で、やはりメリットがあるとそのメリットを磨くという発想で取り組んでいくことが大事だと話題になりました。その考えは、削るではなく、補う。そういう考え方になっていくのではないかと思います。もう 1 点目は、例えば統合の場合、1 つにまとまっていく場合、1 つではなく、選択の可能性を残しておくということです。それは、この子供の学びでもあり、きめ細かい支援にも繋がるということになっています。3 つ目です。教育財源や教員増と書いてありますが、削られてしまうという発想ではなくて、それが手厚くなっていくということです。それからメリットを磨く上で補うとありますが、デメリットの部分があり、そういうものを補うところはやはり社会教育の充実ということで、地域の方の意見や、持続可能な体制というのは学校の力だけではできないので、周りの教育の力を充実していくことが合わせて大事になってくるという話に

なりました。最後になりますが、教育資源を生かすために、コミュニティ・スクールをうまく活用し、支援の充実の力をまだまだあげていくことができるのではないかというところです。以上です。

C グループ

C グループです。まず 1 番目に出たのは、子供にとって最善であること。これについては、社会性であったり、負担であったり、それから活動の広がりであったり。この辺りで子供たちにとって何が最善かを考えていかなければならない。その話の中で、今ここで大人たちで話してるので、子供の意見も取り入れるような取り組みもあっていいのではないかという意見も出ました。2 番目が、子どもたちにとっての安全、安心。通学に対する子供たちの負担。低学年の子たちが通学にどのぐらいの負担、不安があるのかをしっかり考えなければいけないのかなということです。3 つ目が、地域とのつながりです。9 月の話し合いで、各グループ、地域とのつながりというのがメリットの中に出てきたと思います。やっぱりここを大事にしなければならないということで、統合する上で、複数校での統合であれば地域とのつながりも保っていけるのではないかなという意見が出ています。4 つ目に、子供の学びを深めるということです。これはまだ結論が出ませんが、少人数ではできない学びは大人数ではできるし、活動にも広がりがある。逆の部分で、個に応じた対応が小規模校はすごく充実しているようなところを考えると、子供にとっての学びというところで少し考えなければいけないと思います。この他、その他の意見ですが、少人数の経験は小学校じゃなきゃできない。中学校になったら人数の経験ができるのでそういう時代も必要だと思います。それから、どこからもデジタルの話が出てきましたが、デジタルの活用はとてもいいことだと思いますが、やはり人と人との関わり合い、触れ合いという面で考えた時に、デジタルだけではやっていけないのではないかという話が出ました。以上です。

D グループ

D グループです。話している中で、存続と統合というところで、白黒つけるのが難しいテーマだということで話し合いを進めていきました。B グループでも出ていましたが、選択できる学校がすごく理想的ではないかなということで、次期学習指導要領でも出ていた、人生の舵取りというところに繋がるのではないかというところがあります。また、曜日によって、低学年はいるけど高学年は交流会に行ってるとか、修学旅行を 7 つの学校で一緒に行くなどというお話が出ました。統合の場合は、それぞれの地域の良さを残すというお話が出ました。交流会をたくさん行い、中学校で再会する喜びが味わえるといいのではないかというところです。また、コミュニティ・スクールの活用をし、地域の方にたくさん入っていただき、色々な体験ができるのがこの地区の良さではないかという話も出ました。3 つ目は、小学校と中学校で考え方が違うので、それぞれのメリット、デメリットも考えていかなければいけないという話が出ました。小学校では、人間関係が 6 年間変えられないという反面、きめ細やかな担任の先生の指導ができるという話も出ました。中学校では、部活動の人数や先ほど出ました行事の関係などで、大規模な良さを生かしていけるのではないかという話も出ました。4 つ目は、長期的な少子化対策になるんじゃないかなというところです。魅力的なまちづくりを通して下田に住みたいと思ってもらう。サーフィンやグローバル化で出ていった人が帰ってくる、または移住者が増えることによって、長期的な少子化につな

がるのではないかという話も出ました。5つ目は、それぞれの特色を生かした7つの小学校というところで、これも学習指導要領で出されていました。得意を伸ばす、好きなことに全力投球ができる環境を整えていきたいと話もありました。また、教師側の目線で行くと、曜日で勤務する学校が違う、自分の専門教科を教えるなど、明日は下田小学校に行くとか、明後日は稲生沢小学校に行くというような、下田市全体での先生の運用というところを考えていくと魅力的な学校作りができるのではないかなと思います。最後に、特例校を作るということで、不登校対策やそういったところで特例校を作るという話が出ました。その反面、学校の中にも居場所を作ってあげたいなという話も出ました。以上です。

学校教育課　山本指導主事

ありがとうございました。様々な視点からご意見をいただき、大変助かりました。今回出させていただいた提言は、次回に活かしていきたいと思いますので、また次回もよろしくお願いいたします。本日はこれでグループワークを終わりたいと思います。ありがとうございました。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。それでは、以上の皆さまのご意見に加えまして、宮島先生よりお話いただければと思います。よろしくお願いいたします。

静岡大学特任教授　宮島　明利　氏

静岡大学の宮島です。今日、話し合いの中で、例えば、「トライ＆エラー」、「失敗しなければいけない」、また「地域の財をしっかり生かそう」、「７つの学校を大事にする」などのキーワードが出ていて、とても嬉しくなりました。私も前回の話の続きを考えてきました。皆さんの提言とも重なるのですが、聞いていただければと思います。私の入ったＢグループでは、「地区にとって学校は大事である」という話をしていました。本当にそう思います。私の経験から、学校のなくなった地域は、例外なく人口減少が加速化していきます。そういう限界集落というのは、行政がつくっていると私自身は思っています。子供の数が減ったからといって、安易に統合・再編するのではなく、地域の未来、市の未来をどう考えるのか、そのために学校はどうあるべきか、具体的にどんな学校を創るのかということを、当事者である皆さんで知恵を出し合い考えていくことが1番大切なことだと思っています。大学でも、人口減少社会の中、どのように持続可能な教育環境を創っていくのかという内容の講義を行いましたが、その時も同じ話になりました。子供が育つ環境を創ることによって、子供の減り方は緩やかになっていきます。私が最後にいた学校は小学校で36人です。小規模だけれど、全く序列がありません。一人一人が主役であり、グループでいうとみんながセンターです。兎に角よく喋りますし、どんどん周りに自分を表現します。ＪＲ沿線の高校に進学してチャレンジする生徒もいますが、大人数に混ざっても全く問題なくへっちゃらです。みんな自分らしさを発揮しながら活躍しています。「自分の意思で自分磨きを続ける」、そういう子供たちを育てることを目指し、ずっと取り組んできました。

川根本町では、学校のあり方検討協議会を２回やっています。１回目では、前回に話したように、小規模の良さ、地域の良さを生かしきれていないことを受け、「川根本町だからできる川根本町ならではの教育」を展開することに力を注ぐことになりました。６つの小中学校を存続させながら、それまでの学校の当たり前を見つめ直し、次世代型の新しい教育を５年間行い、中山間地のモデルとして評価を得るようになりました。県議会の地方創生特別委員会に参考人として呼ばれ、川根本町の教育の具体を話しました。また、静岡大学で開催された日本教育行政学会のシンポジウムにも参加し、川根本町の取組を全国へ発信しました。さらには、毎年、県内外の自治体や議会、学校から視察に来ていただきました。

そういう成果を共有しながら、さらに地域の方々とさらに町の教育をどうしようかと２回目の議論の場「在り方協議会」を用意しました。事務局側は６校存続を望んでいましたし、小さくても魅力ある教育を進めていくことができると自信満々に思っていました。しかし、地域のみなさんが出した答えは、２つの規模の違う義務教育学校を創るという結論でした。議論を進める中、「小規模の方がいい」、「教員をある程度確保できる」という意見に加え、スタートするコミュニティ・スクールを生かし、地域のみなさんと協働しながら、川根本町だからできる魅力的な教育をさらに進化させていこうという思いが共有されました。

さらに再編が決定した後、全教職員と保護者、町民が集まって意見を出し合い、町の義務教育学校が目指す姿を掲げました。町の未来を託す子どもたちのために、たくさんの町民の方々に、新しい学校づくりの当事者になっていただきたかったからです。私たちはこのビジョンを北極星と呼んでいます。こうして、令和６年４月、２つの義務教育学校が誕生しました。これが私のやってきた 10 年間です。まずは各学校の魅力づくり、そして町全体を俯瞰して未来を見据えて再編問題を考える、この流れがとても大事だというのを学びました。

６校ではなくて、なぜ２つの義務教育学校にしたのかというのは、子どもを持つ保護者の切実な声を受け取ったからです。「小規模がいいのはわかったが、でも小さすぎるのは心配。」という声がたくさん聞かれました。そこで、町で始めたのが里山留学制度です。私の在籍していた学校の２割の子どもたちは、町外から移住して来た子たちです。魅力ある教育に共感して町に移り住み、生まれた時から川根本町にいたような顔して生き生きと学校生活を送っています。

教員の数の確保についても、６校あった時と比べて３分の２の教員が残っています。１つの義務教育学校にしてしまうと教員の数が３分の１、４分の１になってしまいます。当初、私が６校の小中学校を残したかった理由は、教員を目指して学び町の学校に帰ってきてくれる若者の雇用の場所を残しておきたかったのです。学校も大切な雇用の場です。下田にも、教員を目指して一旦ふるさとを離れて学んだ後、再び下田に帰ってきて子供たちに大切なことを教えてくださっている先生がたくさんいると思います。そういうような循環を川根本町でつくりたかったのです。

川根本町でも、議論を尽くして町民の皆さんが出した答え、“２つの義務教育学校を創造する”という報告書を作成しました。大切なことは、協議会や研究会の他、意見交換会 16 回もやっていることです。２年間かけて、「もっと聞く」、「もっと思いを受け取る」ということを大切にし、本当に丁寧に聞き取りを行い、作成した報告書です。

今日、皆さんは提言を作成するという目的に向け、一生懸命まとめられたことだと思います。意見を言

うのは結構簡単ですが、それを形にまとめていくということは、とても大変なことです。これからその作業に入っていくと思いますが、その参考になるようなことを最後にお話ししたいと思います。

川根本町での報告書は、町民や保護者の声を８つにまとめました。この作業がとても大事だと思っています。まず、不安を受け取ります。「２人では少なすぎる」、「４、５人いても女の子が１人だけでは」など保護者の正直な気持ち、子供を持つ親としては当たり前の気持ちをまとめました。ここをまず教育委員会としては受け取らないといけないと考えたのです。次に、「子どもの数を増やす取組を」ということで、町で里山留学制度など町民の皆さんからいただいたアイディアの意見を掲載しました。これは、教育委員会など行政の取組として具体的に取り組んでいくことになります。移住相談会などがそうです。皆さん、共に町の未来を創る味方として、建設的な意見をたくさん出してくれました。さらに、皆さんからいただいた町の教育に対する評価を載せています、これまでの「川根本町ならではの教育」に対する意見を見ると、川根本町の教育は絶対に間違っていなかったと思っています。「子供たちのために５年かけていい取組をしてくれた」、そんな内容の意見を出してくださいました。これらの言葉があったので、私たちはさらに前に進むことができました。関わってくださった皆さんが当事者として、「子供たちのために、より良い教育環境を創りたい」という思いで、数多くの意見を出してくれています。「ぜひ少人数を活かした教育をもっともっと進めてほしい」などの声が報告書の中には詰め込まれています。「縦の連携もするべきだ」、「子供たちの学びは繋がっている。良いことをいっぱいやっているので、もっと PR するべきだ」など、さらなる特色ある教育を進めるための提案もしてもらいました。

このような８つの声を受けて、義務教育学校開校に向け準備を進めていきました。しっかりスケジュール感を出して、町民と共有した北極星と呼ばれるビジョンに向かい、中学校区ごとにワークショップを繰り返し行いました。小学校も中学校も同じ方向を向いてないと学びが繋がっていきません。川根本町は、０歳から１８歳を線で繋ぐ町全体がシームレスな学びの場になるような取組を行っています。当然、学校だけではできないので、地域の皆さんを巻き込みながら進めています。

これが今、川根本町の姿です。私は、下田市は川根本町以上にもっと素敵な教育を進めることができると思っています。それはなぜかというと、それぞれ地域性など全然違う小学校、それぞれの良さを最大限に生かした７つの学校があるということは、すごい魅力であると考えるからです。

中学校を１つにすることを下田の方々は選びました。市民の皆さんの多くの思いが込められ、下田の未来を創る新生下田中学校が開校したはずです。検討会議では、小学校の問題について話を進めてきましたが、実は、小学校の問題はそのまま中学校の問題なのです。中学校の 15 歳の出口に向け、“どのような子どもたちの姿”を目指すのか、掲げている“未来を創る子供”はどういう子たちなのか、目指す子どもたちの姿を共有し、中学校の出口に向けて、小学校で６年間の教育を行っていく必要があります。さらに子ども園や保育所では、その小学校教育の土台となる部分を養っていただければいいのではないかと考えます。

子どもたちの成長は全て繋がっています。０歳から１５歳を繋ぎ、全体の姿を共有したイメージを描いたものが、これからの下田の教育の姿ではないかと思っています。ぜひ、それぞれの魅力を次のステップに繋げてください。また、受け取る側は、育まれた子どもたちの魅力を引き継いでください。０歳から１５歳の繋がりを大切にするといった視点で、小学校、中学校の教育を創っていってもらいたいと思い

ます。

これから各学校において教育課程づくりが始まります。学校間の繋がりを意識しながら、来年の教育課程を考えていただけると、下田の教育が1歩進んでいくかなと思っています。15歳の出口に向かい、それぞれの魅力をつなげるという視点で考えてください。

小学校でも1番に目指すは、中学校の出口にある「下田の未来を創る子」です。15歳の時点でどういう子を育てるかということを市全体で共有してほしいと思います。保護者も地域の人もみんな当事者です。教育ビジョンを示し、共有することが必要になってくると思います。それぞれの小学校で魅力ある教育が展開され、一人一人の良さに磨きを掛けた個々が育ち、下田中学校に入学します。そして、中学校では、掛け算となり、個々の良さが生かされ、化学変化を起こします。7つの魅力ある小学校から集まった子どもたちが化学変化を起こす、そんな中学校を下田中学校で創造してほしいと思います。小学校までのキャリアが大事にされて、さらにそれぞれの良さが輝き、お互いに伸びていく学校、そういう学校をできれば素晴らしいなと思っています。

それから、順番をつけるなら、多様な学びや交流や合同授業、子ども会議、皆さんがしてくださった意見が３番目に入ってくると思います。２番はメリットの最大化、デメリットの最小化です。そして、最後に、再編や統廃合、それから学校選択制や特認校制度などが、さらにアップデートする方策として必要なところになると思います。この順番はとても大切です。そのために、コミュニティ・スクールや、先ほどＢグループでも出たような人員配置や指導体制の柔軟化などを合わせて行っていくと、下田型の本当に魅力ある教育が進んでいくと思います。そうすれば、必ず“下田の教育を受けさせたい”と思う方々がたくさん出てきて、川根本町以上に移住者が増えていくように思います。

私の経験からいくつかお話をさせていただきました。下田で小学校の魅力化を進めていく中で、少しでも参考になる部分があれば幸いです。以上です。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。それでは、最後に参事からご挨拶申し上げます。

学校教育課　宇仁参事

本日はありがとうございました。宮島教授から子供がいなくなる環境は行政が作ると言われてドキッとしました。そうはなりたくないなと本当に心から思いました。今日は、子供の発達段階で、また子供や保護者の心情、地域の方々の思い、あとは先生方、教員の思い、学校施設のことや通学のことなど、本当に幅広いことを考えていただきながら、子供ファーストで協議をしていただきました。会話から聞こえてきた言葉が今の小学校の良さとして、大きな小学校で勤務したことのある先生は素直に賀茂地区の小学校は本当にいいなという声も聞かせていただきました。先ほどの発表もありましたが、子供の少ない小さな学校は今しかできないということや、各地区の良さとして、小学校では、各地区、各学校の特色、個性を最大限に生かすべき、子どもたちが地区から離れすぎない地域を大切にしてほしいという言葉、あとは、ICTでの交流、人と人とが関わり合う実際の交流、先生方の交流、学校独自の文化から繋がりを

持つ、子供の意見を実際に聞く、その子に合った学校作りが必要など、本当にたくさんのご意見や感想を聞くことができました。皆さまからいただいた提言に向けての下田市独自の方策と、あとは先ほど宮島教授からのご助言をもとに事務局側で整理し、提言の元となるようにまとめる時間を少しいただきたいと思います。次回、年明けの２月中旬に第５回を予定しておりますが、そこで提言をまとめていきたいと考えております。本日は、宮島特任教授さま、静岡大学教職大学院の笹瀬先生、そして多くの皆さまに支えられて無事に開催できました。次回もありますが、よろしくお願いします。ありがとうございました。

学校教育課　平川課長

それでは、以上を持ちまして第４回下田市立小学校在り方検討会議を終了とさせていただきます。本日は、お忙しい中、ありがとうございました。